

## 思いつくままに書いてしまった。

第3期 OG 杉山 摩美  
(旧姓 小出)

昨年、2011年2月23日に長男・<sup>たくと</sup>擢人を出産しました。もうすぐ1歳。息子が7ヵ月のときに職場復帰したのも一因でしょうか、驚くほど月日の流れを早く感じます。

私は大学卒業後、(株)野村総合研究所の情報・通信コンサルティング部に2年半勤務、その後、(株)博報堂のマーケティングセンターに所属、産休～育児休暇を経て、現在は(株)博報堂の研究開発局で仕事をしています。いろんな出会いや幸運に恵まれて、どんどんやりたいことに近づいている。そんな気がしています。

小野ゼミを卒業して真っ先に思ったことは、もう何度も口にしていますが、「ずっと小野ゼミみたいなことをやっていたい」ということでした。それくらい楽しくて、昨日の自分より今日の自分の方がちょっと賢いかもしれない、なんて感じていた刺激的なゼミ生活でした。今でもケース発表の前日の徹夜の議論とか、ディベートで負けて泣いたこととか、十ゼミ論文で小野先生に「改悪だね」と言われて血の気が引いたこととか(笑)、鮮明に思い出せます。あの日々がなかったら今の私はない、と迷わず言える自分が幸せだとも思います。

思い出したら思い出が噴き出してきたので書いてみます。私は経済学部出身で、当時他学部生は受かりにくいという噂(?)があり、落ちたときショックなのでできるだけ期待しないように合格発表を待っていました。そのとき隣りで私と同じく1人で待っていて、ちょっと話始めたのが弾んで弾んで、でも「お互い落ちたらこれきりの縁だから合格発表が終わってから自己紹介しよう」と名前も言わず4時間くらい話し尽くしたのが、後に同期になる津田君です。発表後そのままケース発表に流れ込み、津田君と同じチームだったことが嬉しくて、会って間もないのに言わなくても分かり合えるようなそんな友人に出会えた、私のゼミ生活はそんな始まりでした。今や、津田君に対して私は一方的に片思いをしているような関係で、連絡しても5回に1回くらいしか連絡は返ってきませんが、私は一生津田君を嫌いにならないと思う。一方的すぎるので関係とも言えないかもしれませんが、そういう出会いを味わえたのが小野ゼミです。

小野ゼミで初めて体験したことは山ほどあります。たとえば、本に書いてあることを疑ってみたこと。コトラーを疑って、しかも「こうなんじゃないの?」なんてコトラーに意見したときの感動は衝撃的だった。当たり前を疑うこと、見方を変えてみること、否定するのではなく必ず代案を出すこと、これ、今の仕事でも大前提・基盤です。ほかにも、論文リーダーになってチームのごたごたを何とかしようと突っ走って撃沈したこと(「流通班って仲悪いんでしょ」とはもう3期の定型文になっていますが・笑)、ケース

の問題文たった3行の読み込み・解読に3日費やしたこと、議論しすぎて資料作成が間に合わなかったこと、2期の先輩に噛み付いたこと（ごめんなさい）。

広告会社の研究開発って何？って思われる方がほとんどかもしれませんが、今の私の仕事は「生活者研究」です。マーケティングセンターに所属していた時は、あるクライアントから「こういう商品を売りたい」というお題を受けて「どう売るか」を必死で考える、小野ゼミのケースそのものが仕事でしたが、今の仕事はお題がありません。「今の若者ってどういう価値観で暮らしているんだろう？」「家族って今後どうなっていくんだろう？」など、生活者をフラットに見ていくこと、それが仕事です（なにそれ、簡単、うらやましいーと思われるかもしれません）。

でもお題って、実はすごく色眼鏡、です。「こういう商品を売りたい」と言われれば「売る方法」を考える。でも「この商品って本当に世の中に必要なのか？」なんてそもそも論をクライアントに突きつけることはご法度。だからそこは見ないふりをしてスタートすることになります。最も大事なところから目を背けてお題を解こうとすれば、必ず無理が生じ、こじつけの解になります。ときどき「これ絶対変だろ」というCMを見たりしませんか？こじつけが積み重なって後には引けない広告、残念な感じがします。

今、私はそういう色眼鏡を外して自由に世の中を見ていいよ、という幸せな仕事。でもまずお題から自分で作ってそれを解く、というかなりハードルの高い仕事でもあります。でもとっても面白い。小野ゼミ時代に経験した、あの感動・新鮮味をふたたび味わっている感じです。

なんだか散漫な文章になりましたが、とはいえ今私がいちばん幸せに感じるのは、間違いなく子供と主人と過ごす時間です。可愛すぎて面白い。面倒なことも心配なこともひっくるめて楽しいです。子供の話になると、もっともっと散漫になってしまいそうなので、このあたりで止めておこうと思います。



長男・權人